

出典：東京医科歯科大・医・01年

解答

問1

誰の窓にも平等に吹く清風（真理）を悟る道は、自分と対象と風がひとつにとけあい自我を空じることだ。「風のころろ」とは、これを可能にする、物質的現象や実体のない空即ち虚無や境遇に偏らない心のあり方をいう。

問2

心臓外科医が児童らを対象に行った死に関する授業（テレビ番組）が心に残っている。「死とは何なのか」という彼の問いかけに答えられない子供たちに対し、彼は自分の患者と対面させた後に心臓手術のようすを見せる。一つ間違えば患者のいのちが危くなる手術に子供たちの目は釘付けだ。

彼が行ったのは子供たちに風を送る試みである。思わず自分の心臓を押さえてしまう子どもの姿が示すように、風を受けて子供たちは患者の生と自身のそれとの繋がりに気付きつつある。心臓手術自体は物理的振る舞いであるが、彼らが受け取ったのは実体のない物質的現象ではない。更に風の一端は、テレビ画面を通して私の中にも吹き込んだ。私の医療への思いが、明確な像を結んだのである。

今私が考えているのは「病診連携」をもっと拡大したところに、即ち、医療関係者や患者のみならず、地域や社会全体を巻き込み展開される医療である。誰もが病に罹り、誰もがやがては老いや死を迎える。高齢化が進むそうした現実を医療者のみで背負うことが出来るだろうか。老いや死に立ち向かい或いはそれを受容していくには、地域や社会に生きる多くの人々との連携が必要なのだ。

そうした医療に貢献し得るための第一歩は、私の窓に吹く清風を感じ取れるような生き方を目指すこと。そして将来は、あの医師の

ように多くの人々に風を送りまた風を受ける医療者になりたいと思う。

解説

1 課題文について

与えられている文章はエッセイである。エッセイとは、書き手が、自身の自由な思考の流れに任せて綴っていく文章であり、どんなふうの流れどこに行き着くかが、(もしかしたら書き手自身にも)わかりにくいという特性を持つ。ただ半面、書き手自身の基本的な観(ものの見方)や感性のありようは明瞭に現れてくることが多い。こうしたエッセイの持つ特徴を踏まえ、それをうまく活用していくことが、エッセイ読解のポイントである。

入試小論文において資料としてエッセイが課される率はあまり高くはないが、医療系は例外である。例えば、東京医科大学では、一見医療とは関係のない課題文が出題されることもある。なぜ、医療系では、エッセイがよく出題されるのか。大学側が求めていることとエッセイの特徴とを合わせて考えれば、その理由は明らかだろう。自由な思考の流れに沿い綴られるゆえに論理の飛躍や省略などが頻出するエッセイを読み解くためには、教科的読解力だけではなく想像力や共感力などが必要となる。こうした力はいうまでもなく、医療者に求められる基本的資質である。すなわち、大学側は、エッセイを通し、他教科では測ることの出来ない君の資質を見ようとしているのだ。こうした点に十分留意し、まずは、与えられた課題文を丁寧に読むことから始めよう。

2 課題文の概要

課題文は、『風のこころ・ひとのかたちと憂き世のかたち』という書物からの抜粋。最終段落から分かるように、「浮き雲に待つこともなき身にしあらば風の心にまかすべきなり」という句から想起したことを自由に綴ったエッセイである。こうした文章に馴染みの少ない者にとっては読みにくいかもしれないが、設問要求を踏まえ、筆者の思考をたどりつつ読み進めていくとよい。

【第一段落：風とそこから想起する幾つかの句と言葉】

1 風が持つ二つの側面とその特性

▽二つの側面

① 物理現象↓空気の塊としての移動

② 薫ったり、季節を伝えたり、無常のこころを起こしたり、音を立てたり、死んだふりをしたりする生き物

▽特性↓強弱さまざまに、どのような方向にも、どのような場所にも、形を見せずに吹いてくる。

2 1を表す句とその解説

・句↓「清風匠地何の極まりかあらん」

・解説（松原泰道師）

↓清風（真理）はどこにでもあるから、とくに求める必要はない。

↓清風は誰の窓にも平等に吹き込んでいるのだが、それをばばんでいるのは、我見（自我からの認識）の強さ。

3 2と同じ意味の句

・句↓「微風幽松を吹き近く聴けば声いよいよ好し」

・意味↓微風が五官にとらえられない松に吹いて、かすかな音を立てているが、それに近づいて聞けばその音はますます美しく、自分と松と風が一つにとけあう。

↓一つにとけあったところでは自我を空じることができる。

4 3から連想↓「真空不空」という禅の言葉

5 松原泰道師による4の言葉の解説

↓「かたよらないところ・こだわらないところ・とらわれないところ」という高田好胤師の言葉を援用

↓物質的な現象か、あるいは実体のない空に偏ってしまう誤りを説く。

【第二段落…「真空不空」からさらに想起】

「真空不空」に従うと、「色即是空 空即是色」（般若心経） Ⅱ「色（物質的現象）はすべて実体のない空であり、実体のない空であることが、物質的現象なのである」という意味が、理解されるような錯覚を起こす。

【第三段落…「風」についてさらなる想起】

- ・蕪村の風を歌い込んだ句のいずれもが、風を音としてとらえている（森本哲郎氏）
- ・風は温度差（友人の女性編集者）↑女性らしい表現だが感性のことに理屈は不要（筆者のコメント）。
- ・種田山頭火の句

「どこでも死ねるからだで春風」「風の明暗をたどる」「秋風、行きたい方へ行けるところまで」「吹きぬける秋風の吹きぬけるままに」「春風の扉ひらけば南無阿弥陀佛」

【第四・第五段落：まとめ（第一～第三段落までの思考を通し明らかになってきたこと）】

- ・「風のこころ」の意味について、悟道のあり方、かたちに関し誤解をしかかっていた。
- ・誤解の内容：「浮き雲に待つこともなき身にしあらば風の心にまかすべきなり」について
 - ↓虚無的で、生活を捨てた境遇が読ませた歌という響きを感じていた。
 - ↓感覚的理解をしても、生臭い毎日を送る自我が反発するところがあった。
- ・誤解が意味すること↓自分が世俗黄塵のことに心までまみれてしまったことらしい（ということ）。

3 問1について

① 設問要求

- ① 課題文を読み、その内容を理解すること。
- ② 「風のこころ」とはどういうところか、課題文中の文章を利用し、説明すること。
- ③ 一〇〇字以内でまとめること。

② 答案作成へのアプローチ

問われているのは「風のこころ」についての説明である。説明に必要なポイントをつかむには幾つかの方法があるが、ここではもつとも一般的な作業手順を示しておく。

(1) 要求対象を分析⇨要素分ける。

「風のころ」⇨「風」+「ころ」

(2) 要素ごとに、筆者が述べていることを押さえていく。

(a) 「風のころ」という語句が出てくる箇所⇨第四段落

・筆者はそこで「風のころ」について、悟道のあり方、かたちに関し虚無や境遇に傾くという誤解をしなかったと述べている。

(b) 「風」について⇨第一段落に着目

・「風」の特性⇨本来物理現象だが、生き物でもある。どのような方向にも、どのような場所にも、形を見せずに吹いてくる。
・「清風（真理）」は、とくに求める必要はない。誰の窓にも平等に吹き込んでいるが、それをはばんでいるのは、我見（自我の認識）の強さ。

・自分と風が吹く対象（松）と風とが一つにとけあったところでは自我を空じることができる（という松原泰道師の説明を紹介）。

(c) 「ころ」という語句が出てくる箇所⇨第一段落の末文

・「かたよらないころ・こだわらないころ・とらわれないころ」（松原泰道師が、「真空不空」という禅の言葉に関し、「かたよらないころ・こだわらないころ・とらわれないころ」という高田好胤師の言葉を援用し、物質的な現象か、あるいは実体のない空に偏ってしまう誤りを説いている、と述べている。）

(3) (2)をもとに、必要ポイントを整理し、設問要求（「風のころ」とはどういうころか）に応える文を作成。

使用できる字数がかなり少ないので、内容や表現の重複を避け、ポイントを絞り込むことが必要となる。但し、設問では、課題文中の文章を利用せよ（つまり、キーワード、キーセンテンスの言い換えは禁止）という条件が付いているので、自分なりの書き換えは極力避けなければならない。(2)で押さえたことを丁寧に整理し、読み手に分かるような文章にまとめていこう。

4 問2について

① 設問要求

- ① 課題文を読み、その内容を理解すること。
- ② ①を踏まえ、自分は将来医療人としてどうありたいと思うか、述べること。
- ③ 六〇〇字以内でまとめること。

② 答案作成へのアプローチ

(1) 課題文を読み、論述作成の手がかり・ヒントを得る。

課題文では直接医療のことには触れられていない。では、ここからどのようにして論述作成の手がかり・ヒントをつかんでいけばいいのだろうか。

(a) 出題側の狙いを読む。

入試小論文の基本的狙いは、大学で学ぶに相応しい力と資質を持った人間かどうかを試すことである。前者については文献読解力・論理的思考力・文章表現力・基本的知識などを備えているかどうかということが、後者については医療者に相応しい資質（人間性）を持った人物かどうかが試されることになる。一方、本問の課題文は、筆者の人生観・死生観・真理に関する見方等をベースにしたエッセイ（思いを自由に綴った文章）である。こうしたことから、本問で試されるのは、君の医療者としての資質（人間性）あるいは基本的価値観ということになる。設問要求を踏まえれば、まず問われるのは医療観であるが、医療とはいったいなんなのかを考えていくと、その底流をなす死生観、人生観、人間観そして真理追究の姿勢に至る。即ち、それらに関する君の考えや見方を探ることも、出題側の狙いのひとつであるといえそう。さらに、既述したようにエッセイを読むとは、筆者（他者）の思考に身を委ね、それを理解していく作業であり、ここから医療人に不可欠な資質である想像力や共感力も試されてくることが分かるはずだ。こうした点を頭において、筆者の観をつかみ、それを手がかりとして自分の観を展開していくという方向、あるいは筆者の思想からテーマ深化のヒントを得るつもりで、課題文を読んでいくとよい。

(b) 「いま、なぜ、このテーマか」(状況との関連を考える)

小論文課題は「いま」と密接に関係する。ある課題が出題されるのは、それに関し、今、私たちの社会や世界で何らかの問題が起きていたり、解決すべき課題を抱えていたりするからである。またその問題とは、過去に根を持ち、将来に大きな影響をもたらしていく事象や現象である。こうした点を頭においての読解も有効だろう。本問に照らすならば、今医療の分野で起きている問題・問われている課題を想起し、その背景や原因、あるいはその意味や効果(影響)、それらに対する自分(医療人)としての対応などを考察するヒントをつかむことを目指し、課題文を読んでみよう。以下に幾つかの読み方のヒント(例)を示すので、適宜参考にとよい。

▽第一段落から

風が持つ二つの側面↓物理現象と生き物

←

医療のもつ二つの側面を想起(↓論述材料の選択や分析に活用)

例)・科学研究の対象である疾病と、治療の対象となる「やまい」

・治療について↓キユアとケア

・物理的治療法(臓器移植など)とインフォームド・コンセント

……など

風の特性↓強弱さまざまに、どのような方向にも、どのような場所にも、形を見せずに吹いてくる

←

医療現場での問題や課題の特性を想起(↓論点設定、材料選択、分析などに活用)

例)・患者の多様性(一人ひとり異なる人間であることから生じる特性)とそれへの対応の問題(データに頼った診断やマニユアル通りの医療のあり方から生じる不都合や問題) ……など

清風は誰の窓にも平等に吹き込んでいるのだが、それをばんでいるのは、我見(自我からの認識)の強さ

物質的な現象か、あるいは実体のない空に偏ってしまう誤り

←

医療行為における医療者側の問題を想起（↓論点設定や材料選択、分析に活用）

例）・パターンリズムの問題

・患部（部分）を診て、患者（人間）を看まないという医療のあり方の問題

……など

「かたよらないところ・こだわらないところ・とらわれないところ」

←

望ましい医療のあり方、あるいは医療人としてのあり方を考える上でのヒントとして活用。

▽第二段落から

「色即是空 空即是色」（般若心経） 〓 「色（物質的現象）はすべて実体のない空であり、実体のない空であることが、

物質的現象なのである」

←

近代科学（医学）の特性と限界を探る上でのヒントを得る。

例）・近代科学の手法である要素還元主義・分析的手法に着目し、それが進めてきたのは、実体のない空としての真理の追

究ではないか、という論点（問題提起）を立て、医療分野の材料を用いて考察。

▽第三段落から

風を読み込んだ種田山頭火の句：「どこでも死ぬるからだで春風」「風の明暗をたどる」「秋風、行きたい方へ行けるところまで」「吹きぬける秋風の吹きぬけるままに」「春風の扉ひらけば南無阿弥陀佛」

←

山頭火の句にはどれも死が織り込まれていることに着目し、それと比較しつつ、現代社会の死生観の特徴を押しさえ、医療

現場での問題考察につなげていく。

ヒント) ・現代の死は、多くが病院の中の死であり、日常生活で死の過程を見据えることがなくなった。

・一方で、生命科学や医療技術の急速な進展が、生や死の概念の見直しを突きつけているという現状がある。こうした事態にどう対応したらいいのか……。

▽第四・第五段落から

「風のころ」についての誤解(筆者の反省)

医療人としてのあり方を考えていく上での参考として活用

……など

(2) (1)を踏まえ、自分は将来医療人としてどうありたいと思うか、自分の考えと根拠を整理し、論述の流れを工夫する。

課題文型小論文作成の基本は、まず課題文の中心テーマとそれについての筆者の主張・論拠を捉え、それに対する自分の立場(賛成・反対・一部疑問等)を定め、独自の材料を用いて自分の主張と論拠を展開していくことである。但し、本課題においては、課題文のテーマと設問で求められているテーマとが一致しておらず、また論理的手順に基づき展開されている文章ではないため、こうした基本的な取り組み方は、そのままでは通用しない。ゆえに、ここでは、出題側の狙いを見据え、設問要求を踏まえての資料(課題文)の活用方法を工夫していく必要がある。その為のヒントを以下に示しておこう。

(a) 基本的な取り組み方をベースとした論述作成

例) 筆者が述べている「風のころ」についての見解への賛否あるいは評価(自分の立場の明示)

その立場をとる基本的な理由の提示(ここで、現代医療の問題などを提示)

問題の背景・原因の分析……(ここで更に課題文を活用してもよい)

←
←
問題解決の方法とそれに向けて医療人としての自分がなすべきこと

「風のこころ」に関わらせての、医療人としての自分のあり方（まとめ）

(b) その他

小論文の構成要素ごとに、課題文をどこでどのように活用していくかを考え、それをもとにして、設問要求を満たす論述の流れを工夫する。その際大事なのは、課題文の核心をなす「風のこころ」についての筆者の考えは必ず押さえ、論述作成に活用していくこと。これを外すと、（たとえ問1が出来ていても）読解不十分という評価を受けてしまう恐れがあるので注意しよう。